



一
茶
坊
茶
話
集
人

5
1206
3





見云上

十端の序子文を端序の末而
 ろの序を紙序の同夜に
 多子十端一紙のくちう見
 眼をこころしとあふ速而
 存とる文をひちとやぬ
 のこころんて叔文と教ふ

とらるるをよみ先後とらるる
不憚千紙の御切つる命一夏
子文とらるる御之教を法ありと
命点しと其教の御まじり
子の中子ありつらひと
しと七十七果ありと
佛經教多の中より御麻といふ言

佛向断の妙所を形容し能く根
をたせし御麻といふは文殊といふ
法勤といふは言の獅子といふ
の庵室といふ新迦櫻の御好といふ
ありとらるる御麻といふは
とらるる御麻といふは
眼花涅槃木妙に身相無相の法の

あつて以て摩訶訶迦葉子附屬
まゝとて佛を宗とせしむるは
神門の御徳を以て傳へしむるは
神といはれは佛を以て人といはれ
は神といはれは佛を以て神といはれ
今古を考へて其靈起せしむ
神のいふことばはちやうとせしむ

此法同とせしむるは
いふことばの未だ信文を意答のふ
其身を世諸事に入らば後世の事
あるは右同のこゝろありては
後のことばを以てしむるは
やせらるの御徳を以てしむるは
身を以て口持し持おしむるは

しるしをて海にへるるも教のさる
と傳ふ人の何れもいふはちうのま
とたつての傳ふはちうのま
らぬ伝ふ坊のつ子傳傳と申すし
らるるまのまのまのまのまのま
のまのまのまのまのまのまのま
て又又又又又又又又又又又又
の一人一人一人一人一人一人一人
傳解せしむるまのまのまのまのま
傳はしむるまのまのまのまのまのま
勿論あるまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのま
又そのまのまのまのまのまのまのま
松花佛生世子の家のまのまのまのま

く物のそ連子に可定くは後身
と又政らゆる心は師あるは方偏
物に物なる連の地より後の人何
ら舞のそ思ひて一なる又之教合
とありて一かたに子なるは其物
蘇の類ひも一第の面あるは初
後よりお後目と切合のあは浄瑠璃
本なるは子果且の一夜に打を其の附
合より五巻の五巻を百巻の百巻同
挿紙のそまゆも一なるは其なる
後階のゆり中い志るは是はとて是
そに我とて打哭るは是なるは同
そ和をいゆるは人のあはるは
地の本あるはゆりて一なるは其の地

蓮師極楽の指図や蓮の極楽
さういふ味もさういふや今の「存念
」の事も後者あるをさういふ蓮師とし
仕度との味もさういふさういふ人
ういふ事もあるさういふ俗のさういふ先
の余もあるさういふのさういふ人さういふ
者も彼もさういふ眼光を寓宇宙とさうい
ぬくさういふ今のさういふ人さういふ人
さういふ一代の後相子とさういふ人さうい
はさういふ眼光を得る人さういふ人さうい
さういふ人さういふ地を満る人さういふ人
如源如新とさういふ人の如新とさういふ人の
如新とさういふ人の如新とさういふ人の
さういふ人さういふ人さういふ人さういふ人の

るは知れぬや此れは心と心とを
みよぬらんれ空を色と見よらん空は
空と見よん真空と見よん此空此
空の端ありや如くは行かん我は
不滅ありやあてはるは僧とある巻
の智くははちく敏捷の義ありは
心と心と強きハちち火の炎とらん
とらんハ石中子火の出る何神を
と人を点ちらん其のちちるは保を
焼くはちちやとととらるは
くは神達所の句を果つては
あふ向てらん一世界の人の心と
と見よらん人の心と見よらん
何ちと見よらん人の心と

安の正の同義のきしり西の谷
一と中のはまにありし可なり
遍知のありし僧のありし
うき活のよき
黄門御 初通の記

草の幹の根のり又出の三折
のありし大武の遠の初通の公任の
評と信のり

指の是れ十五秋の記

あはれのありし
山をちのありし
あはれのありし
今もりのありし
評のありし

無以てえりあむし かくどを偽中
解防の糧を得んれりし ねれりし
まに 獅子の口をなするは かくし
又しらは子は江女の侍のふりやのふり
えりし

十篇の草子保四已ま出板古今抄の
同十四已酒出板古今抄子先書は
ら十篇の草子口付のし かくし
ん古今抄子あつてさ一のみの隠す
のあつてはら子ふ世の龜隠るん
とあつてさつて古今抄子口付のし
かくし かくし かくし かくし
口付の古今抄のし かくし かくし かくし
のし かくし かくし かくし かくし

うらぬるのりつ沈没ふくまひあせ
あられえまき蓮院中興ふりあて
まゆいとゆるけりひのひふりひを
信濃の家の「まき」て他のその
あゆみのえたるく万歳一統の勢
古とまき一評し方可とまきしとせ
後信子目のまきひあつらん中一
天佛智見の目ひあて俗子万能
一をまきひあつらん中一
まき信のあまひ
まきひ東西夜信まきひあつらん中一
まきひあつらん中一
まき根とまきひあつらん中一
まき信のあまひ三十四文のつけ夜信

き三十七文は付記の度、母の言
人をして為糸妙子とては女子校生
の同答を其所通照の川合に生
既の眼の光りありき其の智の出入
は母の文に入るるを自ら其の
中居る地本原の地の今も色を
まるとは徳借の得る言のあり
けは子母を頼る子近守遠境の
人〜人回ひ

常に石と茶の〜石の〜
おろし何ぞある〜
翠の〜
三眼子ある子〜
くまの〜

東田三右衛門目録

仙經教文

不御之儀

相探する佐治の儀

不御之儀

しらはははに女

不御之儀

切字 口授

古くお遊の儀
下にきく

御務のむの儀

ちりり又高き
世にきく

御務 ことし

付二日ト奉仕

与座は身の上

付二日ト奉仕

其書は先ん

鳥本切後ニテ

互井

中子コトト

子年ニ由ス

一ノ座ノ設

十篇中ニ由テ

春日秋櫻柳

我ラコトノ由ル

才九段

研金ノコトヲ由ル

切字コトト

古名

親迦十太中子孔子十哲

コトノ師徳を一色ヲ画シテ其徳ヲ示ス

兼徳ノコトヲ師ノ徳ニ是ヲ示ス

五人ノ口傳者去来評六太京作也其

角ありて其角ありて其角ありて其角あり

始終

十篇ノ中ノ十二ノ其ニ

伍名直真名也

曰北六ノ傳者

我ノ口傳者

眼ヲコトト

始子新田ト

因

嘉法在きんしんりあまきぬあてはる

病の有無

編山門下は傳神の儀

文彦月

文彦月の子孫

奇仙月事

古今奇事一巻一巻は世の定評を以て

大和の風神

古今抄は下巻に南無

所々の大和の風神は全神は又面々
解はるべきに傳る例の自知のけと

幽叟 未考

細川三景時代合ふ山

山崎左仙

如師にてト

故斎

孫堂家、嘉士にて

約近奇

不詳に死

多道人 実傳

ワ

五條式

三人の月始方なり他
概するの儀

一句一重

始方なり

同答目録別紙

野子モ是

死嫁と鑑、下、以傳

佛經新文、一

法相宗を用ゐる新義、名目之。依之。

自業、隣近、相遠、有妙、對稱、

云、依之新のり、死若して隨和均所

以る其平生に五攝あり在佛家の名

目子の毎交ひ其行當りかし

依之し其其の脚を各事よりの中

現のありし其其の脚を各事よりの中

死若して隨和均所、以る其平生に五攝あり在佛家の名

目子の毎交ひ其行當りかし

依之し其其の脚を各事よりの中

現のありし其其の脚を各事よりの中

死若して隨和均所、以る其平生に五攝あり在佛家の名

目子の毎交ひ其行當りかし

於此の格と云ふは、
古く於此、九丁ノ方、十丁ノ方、
〜
自念ノ人、彼古格、
篇ノ如ク、
有ル、
と云ふ又、
中世ノ末ニ、
現世ノ内秘、
神ノ遠近、
と云ふ、
ある、
新傳ノ書、
と有る、
十編、

板着糸舫、同十と古今、
至れて享保十四と有、
遷化あるにけり、
如く、蓮、
中、
五、
勤、
玄、
他、
と、
藤、
と、
其、

ふいふ一海にきつひに西井の事
こゝに又廿年あつたれきつひの事
あつたつひの事細信口あつたつひの事
一子お侍あつたつひの事
神の事あつたつひの事
先子あつたつひの事折角神文血判
の事あつたつひの事
斗の事あつたつひの事
彼の事あつたつひの事
くゝあつたつひの事
二十四丁の事あつたつひの事
其の事あつたつひの事
の事あつたつひの事
あつたつひの事

此よりして他は地と信るを以て
病首無の下其角の山頭首より
而自得の事なるを以て下は信るを序
ありと初物候子云 拾遺集所撰の附
公任人の事なり

新書に云ふしこの事なるは

ちの信を以てとあるぬ人なりと云
は新書に云ふ山院勅定より紅葉の錦と
云ふこと入るなりと云 勅書中より此の事
を以て信るなりと云 而して此の信
ありと云ふことと云 其信を以て此の事なる
入させぬことと云ふことあり
春 秋 撰 集 の 附 其 事 なる こと なる 人 なる
事 なる こと なる 人 なる こと なる 事 なる

カトシマシマシカニ 柳を十端の絲
後儒の下 柳の下に付と云る句
為る所はのには付 今古今を倚
下りる能 只今今を倚
此其の六義の秋も 柳の二
存人のの意は

莊子の有徳者子南可也との又と云
華好の真言也との又と云
蓮師の或は白毒の不孫と形容せ
巨連縄 其清徳の三義也と云
の又と云 柳の二
の又と云 柳の二
の又と云 柳の二
文人家の此と云るの雅俗は

取武の御代神龜二丁丑年卒去
也年曆百八十一歳目右有今集
披各語者確然の御代表本五丁見
は以を持ををさく何ある人を廻りけ
古今抄五万法一削の序子家永五
乙丑年と云換のぬりしと云ぬれ
是あたを歩りまゝの人一日中へある

一丁見くかん
向後元名は一語一語
向後十丁

御代と一分集つ子まゝと云るは是人
信のたけのたれと分らまゝ一丁見
まゝと云るは安知を得るを信
のたれと云るは諸合子情をまゝと云
のたれ

又口念三業下子止ると正と云るは

一理あり万有する。一宗の義立佛
佛老莊符奇連任及む方のとの紫
とるあまうは左にありは二十成る
心と心ありは二十而立るは双方の
肉體を燃りて始る佛佛と始る
よ一宗を解いて

穢八戸人々世帯の體は

は心と以て心と傳へる釈迦の迦葉
子有我正法眼花涅槃本妙に實
相無相の法門一摩訶迦葉二附

層スト云々。白活を傳へる三願之義

まを傳へる一と母と麻子とある
授子一魂の味を燃りて芭蕉を
あまうとと十端と文を端候

の述而子あるは教を維摩の同夜
子あるぬとある家と爲す一十二也
と三湖の家とありてありて一也也
の中子あるは三郎一の心と爲す
とえ其三郎一と命と又て信子ぬれ
て又口と名の理と口業の事あり信
たせりて又業を念業子及たしと
流り地己子孔丘のたう口と子字
と解きしむるは口を知念の入
るは言徳の出るは人法の才一は人
あんとけ爲す和奇の者て志と
俗信主作と正しくと信と知と子
と一と止る信りて一と信の釋
機あり種映人より画説とを信り

判物ノ千ヲシハ例ノ知ル者ニハ教ハ知ラサル
者トハ遊フ能諧ノ寛仁ヲ見ルベシ都
テ世法ノ急救カ世法ノ急用トシユ爰
ニ去捨テ彼然ノ譚ニ至リ世法ノ一宗ヲ
建立ストアラハセリ

抄ルルニ白山老師ハ世法ノ一宗トシテ
一子教ルあり〜三瀬ノ湯裏去キテ
世法ノ一宗倭僧ノ本着尊ト云給ハ
其ニ其百話ノうち子自今白山下
一派ノ信者ヲたカクハハ三瀬ノ外境
あり及ノ内秘ト命〜後ハあり
同門同志ト云フ命〜取〜給ハ
あ〜是ト以テ信を去ルルヤ是又同門
子安あり文信ノ境を去テ種門

雅俗より入るはあるべし 和合の元
 言語之急後尊得別来僧愛
 傷より佛より之修より教より
 法よりけ之修より之難より
 變化の乃程教より奉之安を何の
 為何の在と自己に余得あるべし
 十信の大なるありて想結縛互見
 あるべしとありて一茶百信を
 想結縛其大なるありてありと
 ころありありあり
 自注完服表題一茶百信
 先師の命より重なるべし
 尊なるべし
 佛經より佛法不異世間法世間法
 不異佛法と有之より釈尊より世間
 法と佛法と比し給へる老師世法の一
 宗と存あるべし 難有奉之又法庵

和尚山姥の事一差之給の奇の中より
佛法をたつ行を説きし世法も
牙をきくつゝの事教へぬらふ
野ねは奇と念授しきり
佛法し世法しふて叶は
たふぬむらゝの事
一カ面断の中に續立論は佛偈て宗
の大綱を説ける者華老の三三
唯一心の如し仍て續立論初下
十五丁目迄を降し心難き所見の降と
んくくつゝの事其方難し
宗の理致もくは

白話坊

内外
唯一心

石室自野松子の花出ありとて
梅里子の細密をよれしこと
文化八年末の秋を求る九日
庵之燈下に写之在這裏許
の表題と改し事者老師之筆跡
子丹より通せん事有る則師命之
唯一心子道才重く長く世に殘る

